

## ヘッジとしての「もちろん」の歴史

● 高橋 圭子・東泉 裕子\*

### 1. はじめに

現代日本語における「もちろん」という語の意味・用法は、例えば『デジタル大辞泉』には(1)のように記述されている。

- (1) もちろん【勿論】[副] 論じる必要のないほど、はっきりしているさま。言うまでもなく。無論。「——出席します」「酒は——のこと、タバコもいけない」

一方、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (The Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ)」においては、(2)のように逆接表現を伴う用例が多く見られる<sup>1</sup>。

- (2) 日本でも従来の病院の概念を覆すような病院らしくない病院ができてきている。次の特集では、具体的な取り組みを紹介したい。もちろん、すべての人が「理想の病院」と感じるわけではないだろう。だが、かなりの人が「いい」という評判の病院なのである。(【BCCWJ】サンプル ID: PM11\_00322、出版・雑誌、『サンデー毎日』2001年6月17日号)

(2)において「もちろん」で始まる文は、文章全体の主張からいったん逸れ、予想される反論を受け入れる姿勢を見せている。しかし、後続の「だが」に始まる文でその反論に反駁し、あらためて自らの主張を述べ、かえって主張を補強する効果をもたらしている。

このような談話展開で用いられる「もちろん」を、本稿では「ヘッジ」用法と呼ぶ<sup>2</sup>。ヘッジ用法の「もちろん」は、(1)のような語彙的意味とは異なる語用論的意味・機能を担っており、「構文化」(Traugott and Trousdale 2013)と呼ばれる言語変化の表れと捉えることができる。

本稿では、言語変化の普遍的特徴をめぐる探究の一環として、「もちろん」のヘッジ用法の歴史的过程を考察する。

### 2. 先行研究

「もちろん」のヘッジ用法について、先行研究では(3)・(4)のような指摘が見られる。

- (3) 「もちろん給料は高いほうがいい。しかし給料さえよければいいというものでもない。」  
前提を述べて後文の逆接で反転させる用法である。(飛田・浅田2018: 548)

1 下線は筆者らによる。以下同じ。

2 ヘッジ (hedge) とは、「文や語が持つ意味特徴の度合いを修正する接辞、文末表現、前置き表現、慣用句などを指す」(山岡他2018: 139、注6)。本稿では、この定義が談話レベルにもあてはまるものと考えられる。

(4) 「勿論」は、話者の判断が叙述される際、前もってその判断以外の可能性がありうることを述べた上で、意図した判断を述べるパターンが多い。「勿論……だ(だろう)。しかし(が、ただ)……。」という展開である。つまり、「勿論」は何かの判断、主張を補強する注釈のはたらきをする。(趙2013: 227)

(2)の観察および(3)・(4)の指摘から、現代日本語においてヘッジ用法の「もちろん」は(5)のような談話構造で使用されることがわかる<sup>3</sup>。

(5) <主張>。もちろん、<予想される反論>+<逆接表現>+<主張>

このような談話構造における「もちろん」は、話者の主張への反論を受け入れる姿勢を示したうえで主張の補強を導入する、という語用論的標識(pragmatic marker)として用いられており<sup>4</sup>、その意味・用法は(1)とは異なる。

このような現象は、Traugott and Trousdale (2013)において構文化(constructionalization)と呼ばれる言語変化にあたる。「構文化」とは形式と意味のペアである構文が形式的にも意味的にも新たに創造されること、「構文変化」とは意味または形式のみの変化と定義されている。

「もちろん」が(1)とは異なる意味を表すのは(5)のような談話構造においてである。そこで、以下では、このような談話構造を手掛かりに「もちろん」の構文化を検証することにする<sup>5</sup>。

### 3. 調査方法

本稿では、国立国語研究所による「日本語歴史コーパス(Corpus of Historical Japanese: CHJ)」を用いて、(5)のような談話構造を持つ用例を収集・分析する。

公開中のCHJは奈良時代編、平安時代編、鎌倉時代編、室町時代編、明治・大正編から成る通時コーパスであり、コーパス検索アプリケーション『中納言』(2.5.0データバージョン2019.11)を用いて語彙素「モチロン」を「短単位」検索して用例を集めた。

なお、紙幅の関係により本稿では近代語までの用例を考察対象とし、BCCWJを用いた現代語のヘッジ用法についての分析は稿を改めて行うこととする。

3 伊集院(2010)、工藤・伊集院(2013)は、日本語学習者の意見文における「譲歩」+「反論」の譲歩構造を分析したものであるが、譲歩を表す言語形式については今後の課題とされている。挙げられている用例では「たしかに」が多数を占めているが、「もちろん」も1例ある。なお、伊集院らのいう「譲歩」は、本稿における「ヘッジ」と同じと考えられる。

4 語用論的標識とは、発話において命題内容以外の対人的かつテキスト的機能を持つ要素であり、ヘッジ表現もこの一種である。なお、Higashiizumi and Takahashi(印刷中)、高橋・東泉(2019, 印刷中)は「もちろん」の用例を歴史的にたどり、文末における名詞述語から副詞・応答詞といった語用論的標識へ、用法が拡張されていったさまを跡付けているが、ヘッジ用法についての探究はない。

5 柴崎(2017)、Shibasaki(2019)などでは、「構文化」の観点から、「事実」「道理」などの名詞述語用法から語用論的標識への機能変化について文を超えた談話レベルでの考察を行っている。

## 4. 調査結果

### 4.1 概観

表1は、CHJにおける「もちろん」の全用例数とヘッジ用法の用例数を時代ごとにまとめたものである。

表1 CHJにおける「もちろん」の用例

サブ・コーパス	全用例数	ヘッジ用法
鎌倉時代編	1	0
室町時代編	2	0
江戸時代編	45	18
明治・大正編 I 雑誌 (コア) <sup>6</sup>	75	16
明治・大正編 II 教科書	40	2
明治・大正編 III 明治初期口語	41	0

### 4.2 中世（鎌倉・室町）

『日本国語大辞典第二版』によれば、「もちろん」の語の初出は13世紀の『名語記』である。CHJにおいても、用例はすべて鎌倉時代以降のものである。

CHJでは、鎌倉・室町時代の「もちろん」は全3例であり、ヘッジ用法は見られないが、CHJ未収録の文献には、(6)のように13世紀の例が見られる。

- (6) 夜話云、學人ハ必シモ可死可思。道理ハ勿論ナレドモ、タトヘバ其言バ不思、シバラク先ヅ光陰ヲ徒ニスグサジト思フテ、無用ノ事ヲナシテ徒ニ時ヲスグサデ、詮アルコトヲナシテ時ヲスグスベキ也。(岩波日本古典文学大系81『正法眼蔵随聞記』二ノ十八：1238年)  
夜話において言われた。修行者は、必ず、自己の死ななくてはならぬことを考えるべきだ。死すべき道理は無論確実であるが、たとい、その事を思わなくとも、しばらくの間だけでも、まず第一に、時間をむなしく過すまいと思って、必要のないことをして無益に時間を過さないで、効果のあることをして時間を過すべきである。(小学館新編日本古典文学全集44)

また、中世には(7)のように、<逆接表現>は原文に見られないものの、現代語訳では補われている例もある。

- (7) 弁慶つゝ退つて申(し)けるは、「學頭の仰せは勿論に候。然様に縁の上に足駄履いて候だにも狼藉なりと咎め給ふ程の衆徒の、何の緩怠に修行者の面をば足駄にしては履かれけるぞ」と申(し)ければ、(岩波日本古典文学大系37『義経記』：14世紀頃)  
弁慶はぱつと飛びさがり、「学頭の仰せはもっともでござる。だが、そのように縁の上で足駄を履くことさえ乱暴だとお咎めになるほどの衆徒が、いったい何の過失で修行者の顔

6 コア・データは自動でアノテーションを付与したデータに人手で修正を加え、解析精度を高めたものである。

を足駄にして履かれたのだ」と言ったところ、(小学館新編日本古典文学全集62)

(7)のような例は、厳密には(5)の談話構造の条件を満たしていないが、現代語における文や談話の構成方法をそれ以外の時代にそのままあてはめることは適切ではないだろう。今後、用例をさらに精査していく中で、定義についても見直していきたいと考えている。

また、中世の「もちろん」の用例は、「勿論なり」のようにコピュラを伴う名詞述語用法が中心であった(高橋・東泉2019など)。ヘッジ用法においても同様であることが、(6)・(7)などの例からうかがえる。

#### 4.3 近世(江戸時代)

CHJの江戸時代編では「もちろん」の全用例数もヘッジ用法も増え、また、文頭や文中における副詞用法が目立つようになる。例えば、(8)のような用例である。

- (8) そこにやあ異心伝心があるて二三度も往た上の貫引なら直にやるは悪ひ#もちろんもらう気からはすなほにやつたらうれしいとも思ふがおとなしくやる客に金を遣ふ奴はすくねへもんだから詰る所がこつちの懐を見さがされるやうなもんだ# (【CHJ】サンプルID: 52-洒落1779\_01025、『深川新話』1779年)<sup>7</sup>

表2は、CHJ江戸時代編における「もちろん」のヘッジ用法を談話構造別にまとめたものである。用例数がわずかなためこの時代の特徴とは言えないが、少なくともこの調査範囲では、名詞述語でのヘッジ用法や、接続詞の逆接表現は見られなかった。

表2 CHJ江戸時代編における「もちろん」のヘッジ用法の内訳<sup>8</sup>

談話構造	用例数
<主張>+もちろん+<予想される反論>+<-が>+<主張>	11
<主張>+もちろん+<予想される反論>+<-ど(も)>+<主張>	2
<主張>+もちろん+<予想される反論>+<-けれど>+<主張>	4
<主張>+もちろん+<予想される反論>+<-ものの>+<主張>	1
計	18

ただし、CHJ未収録の文献には、(9)のようにヘッジ用法の名詞述語の例も見られる。

- (9) 學の優劣は祿の厚薄によらざる事勿論也。されど、世の人は祿厚ければ學優也と思ひ、祿薄ければ學も劣れりと思ふ事、よのつねなり。(岩波日本古典文学大系95『折たく柴の記』: 1716年)

今後、近世までの古典についてはCHJ以外の文献における用例も調査に加え、議論の精緻化

7 記号「#」は、コーパス検索アプリケーション『中納言』の「文脈中の節単位区切り記号」である。

8 「-」は接続助詞を表す。

を図りたい。

#### 4.4 近代（明治・大正）

CHJの明治・大正編では「もちろん」の全用例数は合計156例とさらに増える。そのうちヘッジ用法は18例であり、ヘッジ用法の全用例数に対する割合は江戸時代ほど高くないが、「勿論であるが」のような名詞述語用法は5例、文頭・文中における副詞用法は13例であり、中世の中心的用法である名詞述語用法より副詞用法のほうが数多く用いられ、近世以降の流れが継続していることがわかった。

表3はヘッジ用法の「もちろん」の副詞用法の例について、談話構造の内訳を示したものである。談話構造(5)の<逆接表現>として使用されているのは、近世の例(8)のような接続助詞「が」が最多であるが、その他の接続表現の使用が認められる。

表3 CHJ 明治・大正編におけるヘッジ用法の「もちろん」の副詞用法の内訳<sup>9</sup>

談話構造	用例数
<主張>。もちろん、<予想される反論>+<ーが>+<主張>	5
<主張>。もちろん、<予想される反論>+<ーれど(も)>+<主張>	2
<主張>。もちろん、<予想される反論>。<接続表現>+<主張>	2
<主張>、もちろん、<予想される反論>+<ーが>+<主張>	1
<主張>、もちろん、<予想される反論>。<接続表現>+<主張>	1
<主張>、もちろん、<予想される反論>+<ーが>、<接続表現>+<主張>	2
計	13

(10)は名詞述語用法の「もちろん」がヘッジとして用いられている例である。

- (10) 外国債の年賦及び利息は…(略)…是は大抵毎年同様ならん」#以上五項の概算年々増減あるは勿論なれども其極少の数は必然壹千万圓の下に在らざるべしと思はる」#買物代價に至ては公布の記録なくして全く概算するヲ得ず#【CHJ】サンプルID:60M 明六1874\_23002『明六雑誌』正金外出歎息録(貨幣四録の二)1874年)

次の(11)は文頭、(12)は文中におけるヘッジ用法の「もちろん」の副詞用法である。<逆接表現>の部分にそれぞれ、「然しながら」「とはいへ」という接続表現が用いられ、<予想される反論>に対して効果的に反駁し、<主張>を補強している。

- (11) さあ是が君の間はれる問題だ。#勿論『流行』といふことを、經濟といふ側の意味から言へば詰り『贅澤』で、更に風教上の堅實とか、克己とかいふ方から見れば、決して喜ぶべきこととは言へない。#然しながらその『流行』を作る裏面、『流行』の世間に現はれた果には、また貴むべき努力や重んずべき効績が輝やいて居る。#【CHJ】サンプルID:

9 「もちろん」は文頭、「もちろん」は文中、「ー」は接続助詞を表す。「.<接続表現>」は「しかし」「とはいへ」などの接続表現を含む。

60M 太陽1909\_05029『太陽』「文教と三越呉服店 潮に随つて波を上げる」1909年)

- (12) 義哉は藝人ではあつたけれど、武術もひととほりは心得てゐた。＃しかし勿論名人ではなかつた。＃とはいへ四五人の破落戸ぐらゐに、退けを取るやうな未熟者でもなかつた。＃  
〔CHJ〕 サンプル ID：60M 太陽1925\_12065『太陽』「長篇小説 馳つかひ (第四回)」1925年)

また、(13)のように、＜逆接表現＞として、接続助詞と接続詞を連続して用いることにより、反駁と主張をより一層強めようとしていると考えられる例もある。

- (13) 又今日我國に於ても、勞働爭議は頻々として所々に起る様である。＃歐洲に於ても、勿論、戦後著しく勃發するのであるが、しかし、彼等には十分の理由と根據とがある。＃歐洲の勞働者は爭議を起す様になつた十分の理由がある。＃〔CHJ〕 サンプル ID：60M 太陽1925\_02006『太陽』「我國民に訴ふ」1925年)

以上、「もちろん」のヘッジ用法は、近世から近代にかけてその用例数が増加したこと、名詞述語用法から副詞用法へと機能が拡張する中で(5)のような談話構造も増え、(1)のような語彙的意味とは異なる機能で使用されるようになったことを観察した。

このような歴史的プロセスは、形式と意味が変化しているという点において、構文化の表れとして捉えることができるだろう。

## 5. まとめと課題

本稿では、まず、現代語の「もちろん」が(5)の談話構造において(1)の語彙的意味とは異なる意味を表し、ヘッジとして用いられていることを指摘した。次に、CHJを利用して「勿論／もちろん」のヘッジ用法の歴史的プロセスを検討し、それを構文化の一例として捉えることができることを指摘した。

今後の課題として、CHJ以外の「もちろん」の用例についての分析、また、BCCWJを用いた現代語のヘッジ用法についての分析があげられる。また、現代語の「もちろん」の中には、「～はもちろん(のこと)、…(まで)(も)」など定型化した表現が他にも存在する。今後はこのような点を中心に「もちろん」の用法を精査し、その歴史変化の全容を解明したい。

## 参考文献

- 伊集院郁子 (2010) 「意見文における譲歩構造の機能と位置—「確かに」を手がかりに—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』第2号、アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会、pp. 101-110. <http://academicjapanese.jp/dl/ajj/101-110.pdf>
- 工藤嘉名子・伊集院郁子 (2013) 「超級学習者の意見文における『譲歩』の可能性」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』39号、pp. 1-15. [http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/73082/2/jlc\\_39001.pdf](http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/73082/2/jlc_39001.pdf)
- 柴崎礼士郎 (2017) 「談話構造の拡張と構文化について：近現代日本語の『事実』を中心に」加藤重広・滝浦真人 (編) 『日本語語用論フォーラム2』ひつじ書房、pp. 107-133.
- 高橋圭子・東泉裕子 (2019) 「『勿論』考」国立国語研究所『言語資源活用ワークショップ2019』<https://pj.>

- ninjal.ac.jp/corpus\_center/lrw/LRW\_2019\_proceedings.pdf, pp. 128-138. (2020年1月17日確認)
- 高橋圭子・東泉裕子 (印刷中) 「語用論的標識としての『勿論』の歴史」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第22号
- 趙英姫 (2013) 「近現代の漢語副詞の成立」野村雅昭 (編) 『現代日本漢語の探究』東京堂出版、pp. 214-233.
- 飛田良文・浅田秀子 (2018) 『現代副詞用法辞典 新装版』東京堂出版
- Higashiizumi, Yuko and Keiko Takahashi. (印刷中) “The development and use of *mochiron* as a pragmatic marker in Japanese”. 『日本認知言語学会論文集』第20回 (2019年度分)
- Shibasaki, Reijirou. (2019) “On the rise of *douride* ‘no wonder’ as a projector and the reformulation of discourse sequential relations in Japanese”. In Shin Fukuda, Mary Shin Kim and Mee-Jeong Park (eds.), *Japanese/Korean Linguistics 25*. Stanford, CA: CSLI Publications, pp. 383-395.
- Traugott, Elizabeth C., and Graeme Trousdale. (2013) *Constructionalization and Constructional Change*. Oxford: Oxford University Press.

#### 関連 URL

- コーパス検索アプリケーション『中納言』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
- 国文学研究資料館 岩波古典文学大系本文データベース <http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>
- ジャパンナレッジ Lib『デジタル大辞泉』『日本国語大辞典第二版』『小学館新編日本古典文学全集』  
<https://japanknowledge.com/library/>

#### 付記

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金による基盤研究 (C) 「英語破格構文の歴史的発達と談話基盤性について—構文化の時間的・空間的拡がり—」 (研究代表: 柴崎礼士郎、課題番号: 19K00693) の助成を受けている。